

川崎巨泉年譜（稿）

年	歳	備 考
明治10年(1877)	1歳	6月2日、川崎源平の三男として堺市神明町御坊ノ前で生まれる。兄は『住吉・堺名所并ニ豪商案内記』の著者兼出版者の川崎源太郎。(『堺の文化財』17号)
22年(1889)	13歳	堺市甲斐町西六軒筋 浮世絵師中井芳瀧に門に入る。(巨泉の回想による)
25年(1892)	16歳	堺市甲斐町西六軒筋 浮世絵師中井芳瀧の門に入る。(当館展示目録・巨泉略年譜)
27年(1894)	18歳	ポチ袋(祝儀袋)画を描く。
29年(1896)	20歳	この年上京。
30年(1897)	21歳	芳瀧住居を大阪市南区鰻谷に移す。 巨泉、東京より帰阪し芳瀧方に寓居する。
31年(1898)	22歳	芳瀧女ハマ子と結婚。(ハマという説もあるが、巨泉は自家版『芳瀧画集』のあとがきで濱子と書いている。)
36年(1903)	28歳	この頃より漸く「おもちゃ」に興味を持つ。
40年(1907)	31歳	3月17日、水落露石邸(聴蛙亭)を訪問した。(『聴蛙亭来訪署名簿』)
44年(1911)	35歳	3月、木彫着色「角雛」創作。 春、大阪十合呉服店で雛人形と古代人形の展覧があったとき角雛を出品。(「おもちゃ画譜」第5集) 11月、『図案小品集』第1集自費出版。(大正元年10月第3集完成) *この頃の住まいは大阪市南区鰻谷西之町33番地。
45年(1912)	36歳	3月、『図案小品集』第2集自費出版。
大正2年(1913)	37歳	2月、模範図案(其一)『大阪印刷界』2月号) 10月、『図案小品集』第3集自費出版。
3年(1914)	38歳	3月、半切百福会を書籍集会所に開く。
4年(1915)	39歳	1月、小品画会を書籍集会所に開く。
5年(1916)	40歳	1月、絵画研究会「葦社」結成。会員には行岡紫雲、粕井豊誠、川崎紫鳳、井上麗泉、山田墨泉、大森豚子、永井霞帆、峰崎米齊(『人魚』1号) 3月、玩具画会を大阪市西区南堀江の書籍商事事務所に開く。その折巨泉着色の伏見焼「笑い雛」を後援者に配る。(『おもちゃ画譜』第9集) 「巨泉玩具画会 川崎巨泉氏道楽的になる同画会は去る十二、十三両日大阪南堀江木綿屋橋西詰北書籍商事事務所にて開催、両日とも同好者の来会多数を極め盛会なりき(『日本印刷界』3月号 3月10日発行) 11月、土焼着色「笑雛」創作。 同月、おもちゃ絵の会
6年(1917)	41歳	6月、玩具絵額画と小屏風の会
7年(1918)	42歳	1月、『巨泉おもちゃ絵集』第1集刊行。(大正8年8月、『巨泉おもちゃ絵集』完成) 5月、類聚おもちゃ絵の会 同月、3日～5日全国絵馬展覧会に出品(郷土趣味社主催 於京都府立図書館) 12月、『おもちゃ十二支』だるまや刊行。
8年(1919)	43歳	5月、百福画会 10月、おもちゃ絵と人形陳列会。おもちゃ絵集完成記念展を大阪三越で開催。
9年(1920)	44歳	6月、『土の鈴』創刊。「撰津住吉のおもちゃ」を寄稿。 8月、「土鈴三種木版」、「里山の紙鯉」、「祇園のおけら祭(『土の鈴』2輯) 同月、「但馬城崎の麥稗絵馬」『郷土趣味』19号 9月、「大阪に無くなった絵馬」『郷土趣味』20号 10月、鶏の玩具絵軸物頒布会、爾後毎年10月、11月に十二支に因み軸物頒布会を催す。 同月、『肉筆おもちゃ千種』第1集頒布(大正10年9月完成) 同月、「和泉堺市白蔵主稻荷」『郷土趣味』21号

10年(1921)	45歳	2月、個人誌『人魚』第1号頒布(昭和3年8月第7号刊完結) 同月、“大阪七福会記念宝船”(コタイブ)、「大阪の七福会」(『土の鈴』5輯) 4月、「京都北野の子貴人形」『郷土趣味』23号 7月、「<絵馬と玩具>土人形に顛われたる模様と着色」『郷土趣味』25号 8月、“三宅島裃” (木版)、「三宅島裃」(『土の鈴』8輯) 同月、「<絵馬と玩具>和泉堺の玩具と縁起物」『郷土趣味』26号 10月、「<口絵>雷に関する玩具(木版)」、「雷に関する玩具」『郷土趣味』27号 11月5日～7日、本山桂川の幹旋で長崎商業会議所にて玩具絵300枚を展覧。玩具絵は桂川の所蔵品(『人魚』2号)
11年(1922)	46歳	2月、「お萬さんお嫁入り」(『土の鈴』11輯) 4月、「蛸地蔵の絵馬」、「大阪瀬戸物の造り物と地蔵祭」(『土の鈴』12輯) 5月11日、同行七人、紫丸で高松へ。金毘羅参詣で師父中井芳龍の師匠中島芳梅の絵馬を発見。(『人魚』2号) 7月、「堺の久の弁財天の祝い餅」『郷土趣味』31号 8月、「<資料短編>河内枚岡神社の晴雨占い」、「<資料短編>相馬妙見社のみだらし紙」『郷土趣味』32号 10月、「琴平詣り」(『土の鈴』15輯) 11月、「燈籠西瓜」『郷土趣味』35号
12年(1923)	47歳	1月、「大阪の子供の悪戯」『郷土趣味』37号 2月、“ふとまがり”(コタイブ)、「住吉ふとまがり」(『土の鈴』17輯) 3月、「大阪の節分」『郷土趣味』39号 4月、「堺のひろあみ売」、「紀伊比井崎村のキチハナ石」(『土の鈴』18輯) 5月、雑誌『柳屋』22号の表紙絵。この号は浪花「道楽宗の巻」。 6月、「大阪の売り声」、「大阪おでんやの売り声」(『土の鈴』19輯) 9月、「宇治名物の張り抜き茶摘人形」(『名物及特産』2巻9号) 10月、獅子頭の絵の会 12月、「昔の千日前」『郷土趣味』48号
13年(1924)	48歳	1月、『巨泉漫筆おもちゃ箱』刊。同月、「鼠の玩具」(『趣味と名物』3巻1号) 2月、「遠起物」、「会津辺りの宮参り奉納羽子板と弓矢」(『趣味と名物』3巻2号) 3月、「縁起もの」(『趣味と名物』3巻3号) 6月、『起上小法師画集』木戸氏版第1輯刊(大正14年5月完成) 7月、娛美会 11月、口絵“神農祭りの虎と奈良土産の鹿”(『難波津』10号) ?月 柳屋画廊15周年記念のポスターを描く。奥村政信筆「短冊色紙売り」を模写したもの。 12月、「奈良大阪名士の南都名物観」の回答者の一人(『趣味と名物』3巻12号)
14年(1925)	49歳	1月、「干支に因み丑の展覧会」(大阪三越開催)に協力。 同月、“木牛”表紙口絵、巨泉談「干支に因む土俗牛の玩具」(『趣味と名物』4巻1号) 2月、『土俗玩具展覧会』刊。 同月、「おもちゃ箱」版画と玩具絵色紙短冊展を大阪三越に開く。 3月、『鳩笛』(ちどりや刊・京都市堺町通三條入ル)創刊。表紙の鳩笛の版画は巨泉の画彫。「玩具の絵について」(『鳩笛』創刊号に掲載) 同月、“琉球の紙雛”表紙口絵(『趣味と名物』4巻3号) 3月15日～4月30日、大大阪記念博覧会(大阪毎日新聞社主催)開催。「大大阪人の信仰を語る七十種の縁起もの」コーナーにて、巨泉は生国魂神社の“獅子頭”など4点を出品。他に西田静波、高橋好劇、村松百兔菴らが出品した。 4月、『土俗玩具展覧会』、『おもちゃ箱』(百枚入り)を東京帝室博物館、帝国図書館、東京美術学校、大阪府立図書館等11ヶ所へ寄贈。(『人魚』5号)

		<p>同月、「伏見人形に就いて」(『鳩笛』2号)</p> <p>5月、「信仰の大阪」(『鳩笛』3号)</p> <p>6月、蒐集趣味人魚の第1回展覧。おもちゃ画絵馬百趣展を大阪堀江の書林俱樂部に開く(14日)。巨泉着色の土焼人魚200個(伏見の大西氏作)を観覧者に贈呈。(『おもちゃ画譜』第4集)</p> <p>同月、「雉子車の話」、「浪華の娯美会と土俗会」(『鳩笛』4号)</p> <p>7月、「スリコミ型」、「人魚雑話」(『鳩笛』5号)</p> <p>同月、「人魚の会・人魚洞主催」(エス生)の記事が載る。(『遊覧と名物』4巻7号)</p> <p>8月、「風流の真似」(『あのみ』大正14年8月号)</p> <p>9月、十二月月玩具絵の会(各月々に因む玩具絵は甲種1組13幅、乙種1組12幅 何れも無表装 甲種絹本 会費一幅25円、乙種絹本 会費一幅15円)</p> <p>同月、「天神と天神」(『あのみ』大正14年10月号)</p> <p>10月、「日本土俗玩具と縁起物(35)」『大阪の三越』</p> <p>11月、「日本土俗玩具と縁起物(36)」『大阪の三越』</p> <p>12月、「日本土俗玩具と縁起物(37)」『大阪の三越』</p>
15年(1926)	50歳	<p>1月、「日本土俗玩具と縁起物(38)三都の虎(干支に因みて)」『大阪の三越』</p> <p>2月、「日本土俗玩具と縁起物(39)」『大阪の三越』</p> <p>3月、「日本土俗玩具と縁起物(40)」『大阪の三越』</p> <p>同月、夫婦で9日間の旅をする。道後、松山、別府、大分、宇佐耶馬溪、博多、宮崎、香椎、二日市、大宰府、岩国、宮島を巡った。(『人魚』5号)</p> <p>4月、「日本土俗玩具と縁起物(41)」『大阪の三越』</p> <p>5月、『おもちゃ十二月』だるまや刊行。</p> <p>同月、「日本土俗玩具と縁起物(42)」『大阪の三越』</p> <p>5月6日～9日、玩具絵展覧会を大阪三越呉服店8階会堂に開く。</p> <p>6月、「日本土俗玩具と縁起物(43)」『大阪の三越』</p> <p>7月、「日本土俗玩具と縁起物(44)番外 ちんわんの唄」最終回『大阪の三越』</p> <p>「此日本土俗玩具と縁起物の画と解説は、大正十一年十月三越カインダ第一号第一号より掲載し初めまして、茲に四十四回、三年半あまりの長いものになってしまいました。其間に解説を試みたものが百種あまり、今後は等のものに掲載して居りますと幾年かゝるか際限がありませんので一時此稿を打ち切り他日又後編を掲載する機会がある事と思います。永らく御愛読下さいました事を厚く感謝申し上げます。著者 川崎巨泉」</p> <p>9月、『郷土の光』第1輯刊(第20輯昭和3年5月完結)</p> <p>同月、『人魚の家』第1号(ちどりや刊)表紙は巨泉自画彫の人魚。「巨泉随筆(1)」掲載。</p> <p>同月、「幽霊の一軸について」(『あのみ』大正15年9月号)</p> <p>10月～12月、『郷土の光』第2、3、4集発行。</p> <p>12月、「巨泉随筆(2)」(『人魚の家』2号)</p> <p>*個人誌『人魚』5号に“後継者を貰い受けたし”と養子を迎えたい切実な訴えを書く。</p>
昭和2年(1927)	51歳	<p>1月、『絵本おもちゃ集』ちどりや刊。1月～5月、『郷土の光』第5～9集発行。</p> <p>4月、「巨泉随筆(3)」、「故淡島寒月翁追悼遺墨展覧」(『人魚の家』3号)</p> <p>6月、「人魚」6号の巻頭に「再生の日」を書く。50歳になり再生したと、新たな誓いの言葉を記す。</p> <p>8月16日、第57回「娯美会」に川崎はま参加。(『あのみ』昭和2年9月号)</p> <p>9月9日、「幽霊供養怪談会」三遊亭志ん蔵・芳本倉太郎主宰。於東区・洞泉寺。巨泉・旦水・好劇らが参加。(『あのみ』昭和2年10月号)</p> <p>10月、宝船の絵の会</p> <p>同月、「幽霊供養怪談会」(『あのみ』昭和2年10月号)</p>

		11月、『柳屋』（柳屋画廊）11月号に巨泉画「諸国羽子板絵四十趣」祝儀袋 四十種一袋 2円20銭の広告が掲載される。 同月、11月26日、「土曜会」発会。娯美会員有志に絵の手ほどきをする。（『あのな』昭和3年1月号）
3年（1928）	52歳	2月、玩具絵展覧会を名古屋松坂屋に開く。 3月、『十二支会・おもちゃ創作会』大阪大丸で開く。（『あのな』昭和3年11月号） 会員：染丸、円馬、円若、蔵の助、小春団治、吉之助、紫翠、一蝶、巨泉など。 4月、「変り雛について」（『あのな』昭和3年4月号） 8月、『人魚』7号に『郷土の光』の詳細な解説を載せる。 9月23日、『娯美会』久しぶりの会で盛り上がる。（『あのな』昭和3年11月号） *天下茶屋に転居・西成区有楽町21番地（昭和2年8月以降のこと）
4年（1929）	53歳	1月、『人形筆誌』第1号刊（4月2号完結）。 2月、浪華宝船会発起。巨泉、粕井豊誠、芳本倉多楼、梅谷紫翠、三宅吉之助、木村且水、高橋好劇ら。（『大阪人』昭和5年3号） 3月、「浪華土俗漫談」（『旅と伝説』第2年第4号） 5月、浪速玩具絵納札会を天王寺公園小宝亭に催す。 6月9日、「浪華趣味道楽宗開宗拾周年紀年 臨時併合大宝事」下寺町二丁目光明寺で開催。（『あのな』昭和4年7月号） 8月、「電車の中の滑稽」（『あのな』昭和4年8月号） 9月、大阪面茶会同人誌『面茶』発刊（7年1月まで5冊刊行） 「大阪のおもちゃと縁起物」（『大阪人』創刊号） 11月22日、大阪人社主催行事、「近松遺跡広濟寺の一日」に参加。（『大阪人』12月号）
5年（1930）	54歳	1月、大阪人主催、郷土趣味新町の会に参加。（『大阪人』2号） 2月、大阪人主催、郷土趣味大阪落語の会に参加。（『大阪人』3号） 3月、「続浪華土俗漫談」（『旅と伝説』第3年第3号） 同月、「続大阪のおもちゃと縁起物」（『大阪人』3号） 同月、大阪人社主催、文楽座鑑賞会に夫婦で参加（『大阪人』4号） 同月、「縁喜物馬の玩具」（『あのな』昭和5年3月号） 6月、「業平さん」（『大阪人』6月終刊号） 10月、「絵馬蒐集漫談」（『旅と伝説』第3年第10号）
6年（1931）	55歳	1月、「羊の玩具」（『旅と伝説』第4年第1号）、「大阪の郷土玩具」（『上方』創刊号） 2月、「絵馬と節分のボテ鬘」（『上方』2月号） 3月、「天王寺に因む玩具と縁起物」（『上方』3月号） 5月、『土俗紋様集』だるまや刊。 6月、自家版『芳瀧画集』（大阪国文社）刊。 9月、「街頭の呼び声」（『上方』9月号） 12月、「街頭の呼び声（追補）」（『上方』12月号）
7年（1932）	56歳	1月、「猿の玩具と縁起物」（『旅と伝説』第5年第1号） 8月、「堺の盆踊唄」（『上方』8月号） 9月、『おもちゃ画譜』第1輯刊（10年10月第10輯完結） 10月、「駅伝東海道玩具案内 - 米原～大阪 -」（『旅と伝説』第7年第11号） 12月、「繰り人形と郷土玩具の首人形」（『旅と伝説』第7年第12号）
8年（1933）	57歳	3月、「大阪の雑祭」（『郷土玩具』3月号：1巻3号 建設社：有坂与太郎編集） 9月、「堺の怪談」（『上方』9月号） 12月、「大阪の春のおもちゃ」（『旅と伝説』第6年第12号） * “三番叟の土鈴”を考案、伏見の大西氏が発売。（『おもちゃ絵画譜』第8集）
9年（1934）	58歳	1月、「大阪の春のおもちゃ」（『郷土玩具大全』一誠社 所収）、「上方の水を語る」（『上方』1月号）

		1月～6月、「人魚洞漫筆①～⑥」(『旅と伝説』) 4月、浪速面茶会主催観桜会 8月～11月、「人魚洞漫筆⑦～⑫」(『旅と伝説』) 12月、肉筆人形絵小品頒布会
10年(1935)	59歳	1月、百鈴会展観 3月、「大阪玩具の変遷」(『上方』3月号) 4月、浪速面茶会主催観桜会 7月、「大阪市内の神社に関する土俗信仰と縁起物その他」(『上方』7月号) 8月、「京阪車の玩具一束」(『旅と伝説』第8年第8号) 10月、「アサヒビールと情歌」(『上方』10月号) *この年、大阪市天王寺区逢坂上ノ町93番地に転居。
11年(1936)	60歳	1月、「凧の話」(『上方』1月号) 3月、「阿波の郷土人形」(『上方』3月号) 4月、「子供遊びの悪口」(『上方』4月号) 6月、「伏見人形の西行法師」(『上方』6月号) 7月、「大阪の目無し達磨」(『上方』7月号) 8月、「時鳥のおとしぶみ」(『上方』8月号) 9月、「上方自慢」(『上方』9月号) 11月、「滑稽は自然の中に」(『上方はなし』8集) 12月、『おもちゃ博覧会』(だるまや刊・大阪市南区南炭屋町25)
12年(1937)	61歳	1月、「牛の玩具、朝風呂譚」(『上方』1月号) 4月、人形玩具絵の会 5月、「魚じまと鯛」(『上方』5月号) 9月、「思い出すことゝも」(『上方はなし』18集)、 同月、「日清戦争のポンチ絵」(『上方』9月号)
13年(1938)		1月、「上方地方の虎の縁起物と玩具」(『上方』1月号) 2月、「瓢箪山稲荷の辻占」(『上方』2月号) 4月、「話の上手下手」(『上方はなし』25集) 同月、「桜と玩具」(『上方』4月号) 6月、「<随想>ゲテモノの流行」(『鯛車』6号) 8月、「昔にもどる」(『上方はなし』29集) 9月、「物には馴れる」(『上方はなし』30集) 10月、「名画の幽霊」(『上方はなし』31集) 同月、「<随想>貯金玉」(『鯛車』10号) 11月、「高松の嫁入人形」(『上方』11月号) 12月、「徳利帳」(『上方はなし』32集) 「影燈籠と友引人形(塚)」(『上方』12月号)
14年(1939)	63歳	1月、「公演会所感」(『上方はなし』33集) 同月、「兎の玩具」(『上方』1月号) 3月、吾八の「コレクション」誌上にて雛絵色紙展観。 4月、「百足と土瓶の手」(『上方』4月号) 7月、「太郎平さん」(『上方はなし』38集) 8月、「中井芳龍」(『上方』8月号) 8月、「南仙酔(なんせんす)」(『上方はなし』39集) 10月、「話題二ツ」(『上方はなし』40集)
15年(1940)	64歳	1月、「深草の駒女(『上方女性鑑』の諸相)」(『上方』1月号) 3月、「<郷土玩具再吟味>流し雛(有坂与太郎・吉村蕪生)」(『鯛車』27号) 4月、「<随想>大阪会談(有坂与太郎)」(『鯛車』28号)

		5月、「<随想>こけし模様」(『鯛車』29号) 6月、「上方郷土玩具、上方玩具(目次カット)」(『上方』2月号) 7月、「伏見人形の伝説、廻り燈籠(目次カット)」(『上方』7月号) 「<随想>幸右エ門型」(『鯛車』31号) 9月、「<郷土玩具再吟味>こけし(有坂与太郎・木戸忠太郎)」(『鯛車』33号)
16年(1941)	65歳	1月、「<論説>第二の国民」(『鯛車』37号) 2月、「住吉の土俗信仰」(『上方』2月号) 4月、「<随想>一銭九厘屋」(『鯛車』40号) 6月、「<随想>思い出す儘」「<随想>こけし十句」(『鯛車』42号) 9月、「<随想>人形玩具絵」(『鯛車』45号) 10月、「<随想>小物玩具」「<随想>静波の光り」(『鯛車』46号)
17年(1942)	66歳	1月、「上方地方の馬に因む玩具(目次カット)」(『上方』1月号) 同月、「<論説>玩具の出陣」「<随想>大阪と戦争玩具(梅谷紫翠)」(『鯛車』49号) 2月、「<扉絵>松阪版木」(『鯛車』50号) 3月、「虎岩の硯」(『上方』3月号) 4月、「<随筆>玩具異変」(『鯛車』52号) 5月、「<論説>民玩の南方進出」「<愛玩拾遺>川崎巨泉」(『鯛車』53号) 7月、「<随想>みなとこけし」「<こけし集覧>こけし楽可讃」(『鯛車』55号) 8月、「中井芳瀧の片影」(『上方』8月号) 9月15日、午前7時55分逝去。法号「幽谷院芳雲巨泉居士」。墓所は堺の大安寺。 9月17日、午後2時阿倍野斎場で葬儀が行われた。(『鯛車』59号) 10月1日、有坂与太郎宅で日本民族玩具協会の評議員有坂与太郎、田畑豊太郎、小山彰、田中野狐禅、秀島孔、平岩富士蔵、増永隆により、9月15日を巨泉忌と定める。(『鯛車』59号) 11月、「<随想>見当らぬ玩具」(『鯛車』59号)

参考文献：「柳屋」三好米吉編 柳屋画廊発行(728.2-319N)、「郷土玩具の先覚者 川崎巨泉翁を偲ぶ」川崎巨泉翁供養会 村田書店製作 昭和54年(759.9-27N)、「大正記念博覧会誌」大阪毎日新聞社編発行 大正14年(807-203)、「鳩笛」第1号～8号(完結)：5号欠 ちどりや発行 大正14～15年(949-22)、「旅と伝説」復刻版 岩崎美術社発行 1978(雑2619)、「第一回巨泉忌」奥村寛純編 村田書店製作 川崎巨泉翁供養会 昭和54年(759.9-26N)「おもちゃ画譜」1輯～10輯 川崎末吉発行 昭和7年～昭和10年(949-6)、「難波津」第1～第10集 だるま屋発行 大正13年～大正14年(雑687)、「大阪人」木谷正之助編 大阪人社発行 昭和4年～昭和5年(雑814)、「郷土玩具大全」萩原正徳編 一誠社発行 昭和9年(949-103)、「土の鈴」(復刻版)1輯～19輯(大正9年～大正12年)村田書店発行 1979(雑3423・中央図書館蔵)、「趣味と名物」大正12年～大正14年、名物及特産社発行(P60-18N)、「遊覧と名物」、「名物及特産」名物及特産社発行(雑3634)、「鯛車」日本民族玩具協会発行、「人魚の家」大正15年～昭和2年 ちどりや発行、「大阪印刷界」(雑354)、「大阪の三越」(1925～1928)三越呉服店発行(雑2617)

*年譜は大阪府立図書館作成の「川崎巨泉画伯遺墨 人魚洞文庫絵本展覧会目録」昭和18年9月発行をもとに、上記の参考図書から府立図書館作成の年譜にない項目を追加して作成した。また1部、文字の訂正も「郷土玩具の先覚者 川崎巨泉翁を偲ぶ」を基に行ったところがある。

凡例：9月、「宇治名物の張り抜き茶摘人形」(『名物及特産』2巻9号)は、発表月、「」は文章題、『』は掲載雑誌名、巻号

著作：「上方」誌：上方地方の馬に因む玩具(目次カット)(1)、虎岩の硯(3)、中井芳瀧の片影(6)、タイトルの後の()内の数字は雑誌の月号。

<参考>雑誌「郷土趣味」、「郷土雑誌 上方」、「鯛車」掲載の川崎巨泉の論考・随筆・カット等

「郷土趣味」郷土趣味社発行(雑2839)

大正	号	タイトル	大正	号	タイトル
9年	19	但馬城崎の麥得絵馬	10年	27	<口絵>雷に関する玩具(木版)、雷に関する玩

					具
"	20	大阪に無くなった絵馬	11年	31	堺の久の弁財天の祝い餅
"	21	和泉堺市白蔵主稲荷	"	32	<資料短編>河内枚岡神社の晴雨占い、相馬妙見社のみだらし紙
10年	23	京都北野の子貴い人形	"	35	燈籠西瓜
"	25	<絵馬と玩具>土人形に頼われたる模様と着色	12年	37	大阪の子供の悪戯
"	26	<絵馬と玩具>和泉堺の玩具と縁起物	"	39	大阪の節分

「郷土研究 上方」上方郷土研究会編 創元社発行 (雑 468)

昭和	号	タイトル	昭和	号	タイトル
6年	創刊	大阪の郷土玩具	12年	9	日清戦争のポンチ絵
"	3	天王寺に因む玩具と縁起物	13年	1	上方地方の虎の縁起物と玩具
"	9	街頭の呼び声	"	2	瓢箪山稲荷の辻占
"	12	街頭の呼び声(追補)	"	4	桜と玩具
7年	8	堺辺の盆踊唄	"	11	高松の嫁入人形
8年	9	堺の怪談	"	12	影燈籠と友引人形(堺)
9年	1	上方の水を語る	14年	1	兎の玩具
10年	3	大阪玩具の変遷	"	4	百足と土瓶の手
"	7	大阪市内の神社に関する土俗信仰と縁起物その他	"	8	中井芳瀧
"	10	アサヒビールと情歌	15年	1	深草の騎女(『上方女性鑑』の諸相)
11年	1	凧の話	"	6	上方郷土玩具、上方玩具(目次カット)
"	3	阿波の郷土人形	"	7	伏見人形の伝説、廻り燈籠(目次カット)
"	4	子供遊びの悪口	16年	2	住吉の土俗信仰
"	6	伏見人形の西行法師	"	7	水饅頭
"	7	大阪の目無し達磨	17年	1	上方地方の馬に因む玩具(目次カット)
"	8	時鳥のおとしぶみ	"	3	虎岩の硯
"	9	上方自慢	"	6	中井芳瀧の片影
12年	1	牛の玩具、朝風呂讃			
"	5	魚じまと鯛			

「鯛車」有坂与太郎編 日本民族玩具協会発行

昭和	通号	タイトル	昭和	通号	タイトル
13年	6	<随想>ゲテモノの流行	16年	46	<随想>小物玩具
"	10	<随想>貯金玉	"	46	<随想>福達磨
15年	27	<郷土玩具再吟味>流し雛(有坂与太郎・吉村蕪生)	"	"	<随想>静波の光り
"	28	<随想>大阪会談(有坂与太郎)	17年	49	<論説>玩具の出陣
"	29	<随想>こけし模様	"	"	<随想>大阪と戦争玩具(梅谷紫翠)
"	31	<随想>幸右エ門型	"	50	<扉絵>松阪版木
"	33	<郷土玩具再吟味>こけし(有坂与太郎・木戸忠太郎)	"	52	<随筆>玩具異変
16年	37	<論説>第二の国民	"	53	<論説>民玩の南方進出
"	40	<随想>一銭九厘屋	"	"	<愛玩拾遺>川崎巨泉
"	42	<随想>思い出す儘	"	55	<随想>みなとこけし
"	"	<随想>こけし十句	"	"	<こけし集覧>こけし楽可讃
"	45	<随想>人形玩具絵	"	59	<随想>見当らぬ玩具

「鯛車」59 は“故巨泉氏追悼号”(昭和17年11月1日発行)

(注) 随想等の分類名は、「鯛車」の索引に従った。

平成18年度中之島図書館

「これがおもちゃ絵だ！」展関連講演会レジュメ

演題『おもちゃ絵画家・川崎巨泉の仕事』

～郷土玩具をめぐって～

講師：北原直喜（日本郷土人形研究会・代表世話人）

◎ 川崎巨泉のプロフィール

明治10年泉州堺に生れる

本名は川崎末吉

明治25年当時堺に居た大阪最後の浮世絵師、中井芳瀧に入門、当時堺には造り酒屋も多く、引き札やラベルのデザイン等が主な仕事であった。

明治30年堺から鰻谷に芳瀧が転居、芝居絵の版下の仕事が多くなった為と思われる。

明治31年、芳瀧の娘ハマ子と結婚

郷土玩具に興味を抱く（明治36年頃から晩年まで）

商業美術や新聞の広告図案の執筆で一世を風靡する

金鶴香水、御園白粉、クラブ白粉、等当時新聞広告の花形であった化粧品、売薬の一流広告を手がける。

郷土玩具趣味家との交流

各種のおもちゃ絵集の出版

在阪各種の趣味会に参加

面茶会 美葉会 娛美会 浪華道楽宗 浪花須耽譜会

七笑会他宝船 納札天狗会 八手会 毛呂手毛羅緒会

大阪ヨタヨタ会 五十鈴会、百鈴会

雅号・・・巨泉、芳齋、虚僊、巨の字、季坊、白水、碧水居

碧水坊、碧水軒、魚水、人魚洞、人魚子など

昭和17年9月15日逝去、行年66歳

巨泉忌・・・昭和18年9月15日 第一回日本民俗玩具協会
主催

昭和19年9月15日 大阪の趣味家で偲ぶ会

昭和54年9月15日 川崎巨泉翁供養会として
「おもちゃ画譜」復刻を記念して開催された。

◎ 川崎巨泉の郷土玩具趣味とその業績

郷土玩具趣味を関西に根付かせた

後輩の育成

おもちゃ絵集の出版・・・巨泉おもちゃ絵集（大正七年）

おもちゃ千種（大正9～10年）

巨泉漫筆おもちゃ箱（大正13年）

郷土の光（大正15年～昭和3年）

おもちゃ画譜（昭和7～10年）

各地のおもちゃ誌に投稿・・・土の鈴、人魚、鯛車、

吾八コレクション

在阪各種趣味の会に参加

おもちゃ掛け軸の製作

木版はがき（年賀状、暑中見舞い）の作成

長谷川小信と双壁

創作玩具の提案（各地の名所旧跡、伝説を材料にした新しい玩具のデザイン提案、「鯛車」59号巨泉追悼号の中に氏の遺稿として「見当らぬ玩具」として43点の自案の洒落玩具を披露しています。

◎ 郷土玩具趣味の歴史・・・郷土玩具とは

江戸時代の郷土玩具趣味・・・耽奇会と耽奇漫録

文政7～8年

谷文晁 西原一甫 滝沢馬琴

江戸時代の郷土玩具文献

江戸二色（安永2年1773年）北尾重政

江戸時代の随筆

骨董集 山東京伝

嬉遊笑覧 喜多村信節

守貞漫稿 喜田川守貞

明治時代の大供玩具

うなみの友 清水晴風

大正時代から戦前まで・・・土俗玩具地方玩具から郷土玩具

東京、名古屋、大阪での郷土玩具趣味発展

東京 有坂与太郎 宮尾しげお 鈴木凡太郎
名古屋 浜島静波 伊藤蝠堂 稲垣豆人
大阪 川崎巨泉 青山一步人 岸本彩星

◎ 大阪の郷土玩具趣味・・・大正から戦前まで、当時の趣味家の顔ぶれ

川崎巨泉、岸本彩星、三宅吉之助、芳本倉多楼、中西竹山
粕井豊誠、木村旦水、梅谷紫翠、井崎一蝶、太田小宝、
福井貫進、松川美都里、高橋好劇、西田静波、青山一步人
藤里好古、木下夢人、河本紫香、村松百兔庵、大沢鯛六
横田聡明、小谷方明、駒井虚峰、瀬川俊峰、塩山可圭、
鷺見桃逸、佐野三壺、宮地留之、岡本三男他
桂小春団治、橘家蔵之助、林家染丸、三遊亭円馬、三遊亭
志ん蔵、

◎ 村松百兔庵資料に見る大阪趣味界

各種趣味の会

浪花我楽多宗・・・

元々は東京で大正から昭和のはじめに

かけて東京中心の蒐集趣味家の交友会名で、自らを「がらくた集め」と称して洒落で「我楽多宗」という仏教の一派に見立てて、寺号を雅号にして楽しんだもので、三田林蔵と云う人が始めたもの。

大阪でも別派を作ろうと云う事になり「浪花我楽多宗」を結成した。川崎巨泉は西国33箇所の内、10番札所で寺号は、「碧水山、虚僊寺」、寺印は美江寺の蚕鈴に達磨と鳩笛でした。

娛美会

旦那衆の道楽、写真から伺う当時の集まり

やつで会

河本紫香など当初8名で順番に当番制で各地のおもちゃを集めて頒布した。最後は20名強になっていた

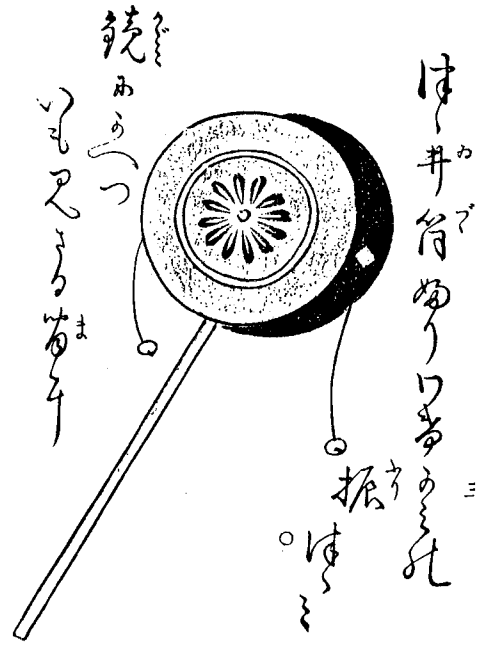
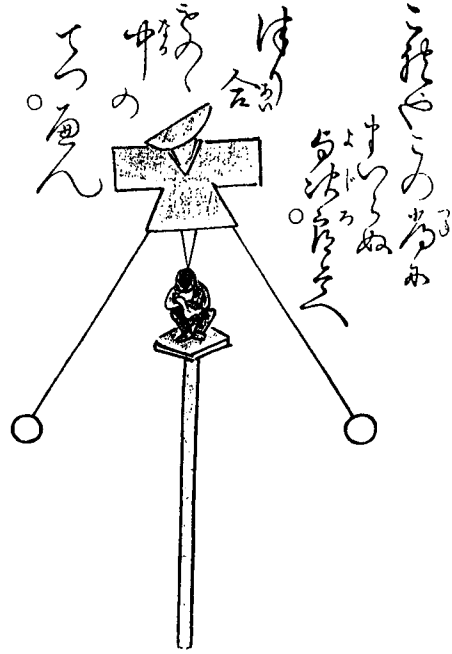
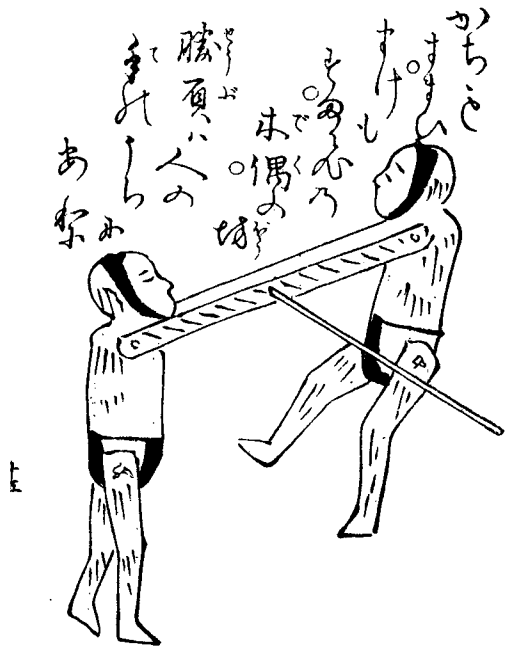
面茶会

おもちゃを面茶と当て字した戦前大阪の郷土玩具愛好家の親睦団体、桂小春男治や三遊亭園馬などの落語家も参加

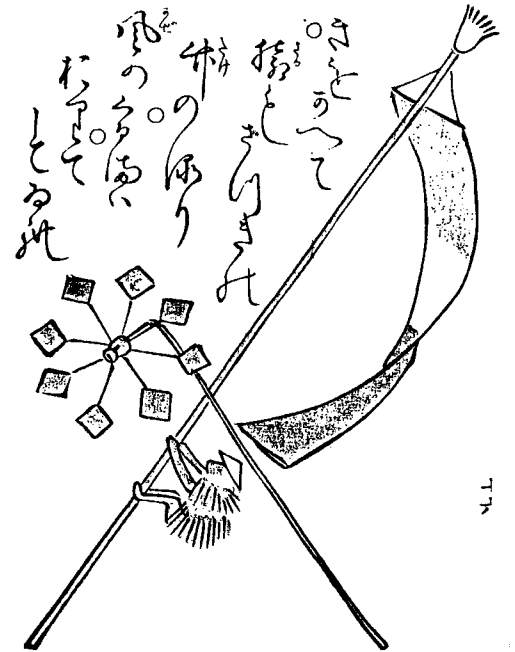
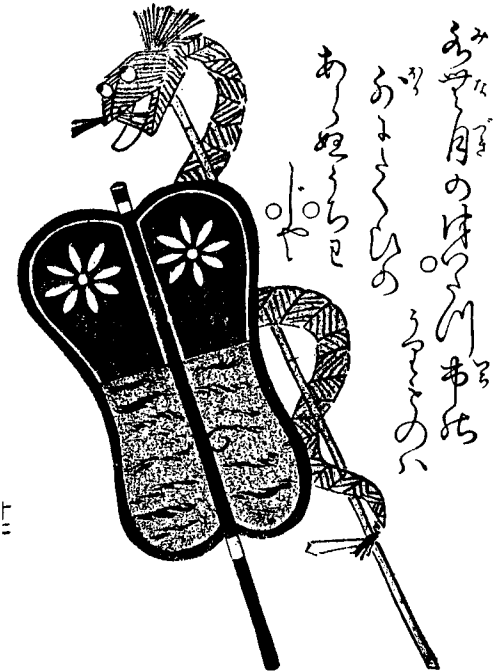
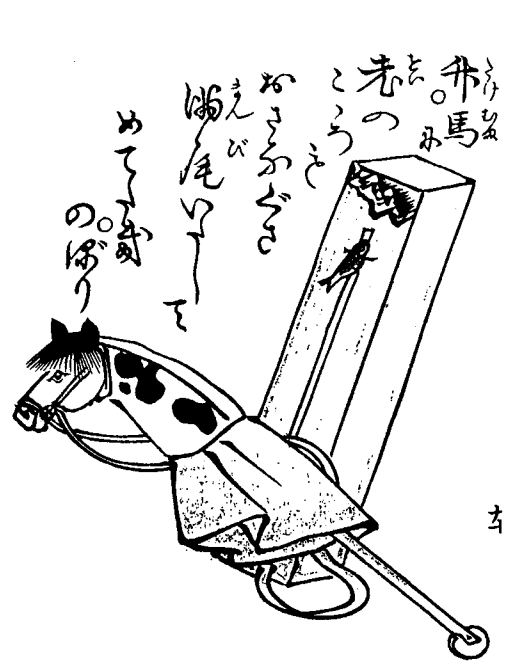
◎ 川崎巨泉のおもちゃ絵と実物との対比

大阪のおもちゃ・・・大阪張子、大阪練り物、住吉の土人形、生玉人形その他

江都二色 (安永二年・1793)



畫工 北尾重政
 讚者 弄簾子
 (木室卯雲)
 安永二歳癸巳正月
 大傳馬町三丁目
 鱗形屋孫兵衛版





清水晴風

「明治一三年の春、余が友竹内久遠ぬしの向島言問が岡にて竹馬会てふことをよほし、友かきむすぶたれかれ打つどひたる席に、国々のいにしへより伝はりし手遊之品あつめつらね人々に示されぬ、予も其席にありて此しなを見、美術とはかかるものをいふなるべしと深くおもひをおこし、今世の中美術と称するは絵画刻物をはじめ数々ありといへども皆これ高尚にすぎて予が如きもの愛しえられべきにあらねば、此手遊品に至りておのづから天然の古雅をそなへ土もて造れるあり、木にて刻めるあり、其国々の風土情体を見るにたるべしと感ずるあまり諸国の手あそび品を集めむことをおもひたちて、自ら京坂又は奈良地方其他の国々へ遊歴せしをりく或はしたしき友の旅行をききてはこれにこつてなどして集めしに、はじめ思ひおこししよりはや十あまり二とせをすこし、数は三百点を超え類は百余種に及びしものから、朝夕此品々を側に置いて愛撫し、聊か美術心をやしなふものとあはなしぬ。今春たまたま木むらぬし来り、予が手遊を愛するを見ておなじころを生し、今かく遠きちかき種々のしなを集め一人乃楽みに過さんよりこれを広くひとびとに知らしめなば、美術をめづる今日にありては世に益すること多からめ、よろしく上梓して一の冊子となすべしといふ、予も常に其心あればそがいふにまかせ、みづから拙き筆にものでこれを与へぬ、時に明治二十余り四とせといふ九月すゑの日本業の余暇、清水晴風しるす」

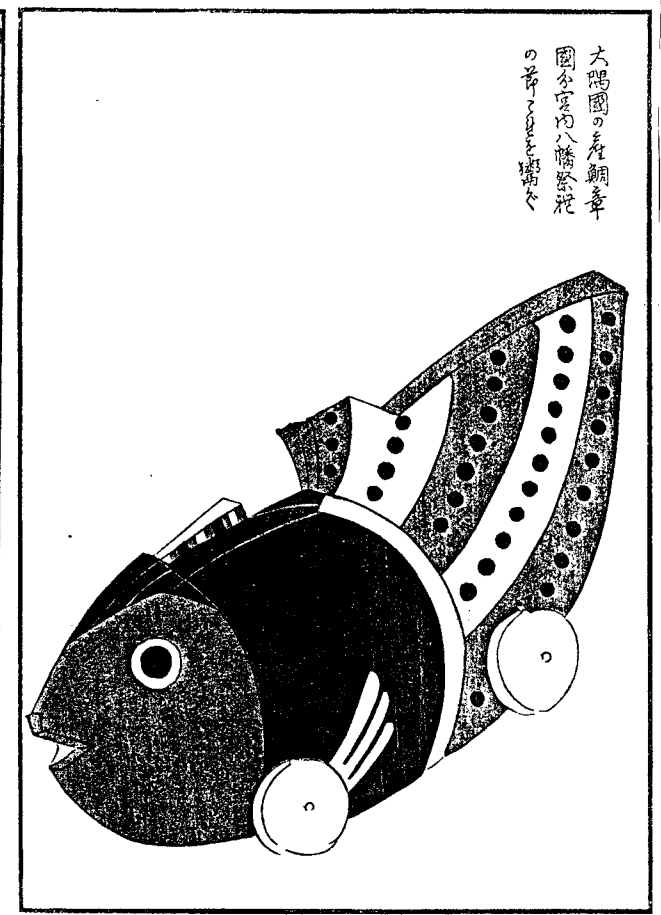


狂後國の
ベント人形

流後柳川の町
よまき
籠車

長崎の産
土製人形

45



大隅國の産鯛章
國分宮内八幡宮花
の節くしを瑞々



大坂今宮曳屋の
社子正月十ヨコ
瑞々十日曳屋の
奏物といふ

大坂よき人形といふ
種類あり
は土製あり

大坂おの
社子正月十ヨコ
瑞々十日曳屋の
奏物といふ

25



招前の紙製
かんざし人形

奥州の関の
手遊
女将女留といふ

出羽坂田の
瑞々人形苗

出羽の國
手遊

32